

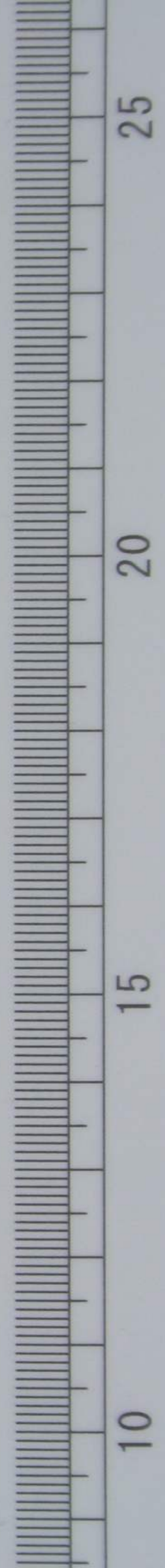
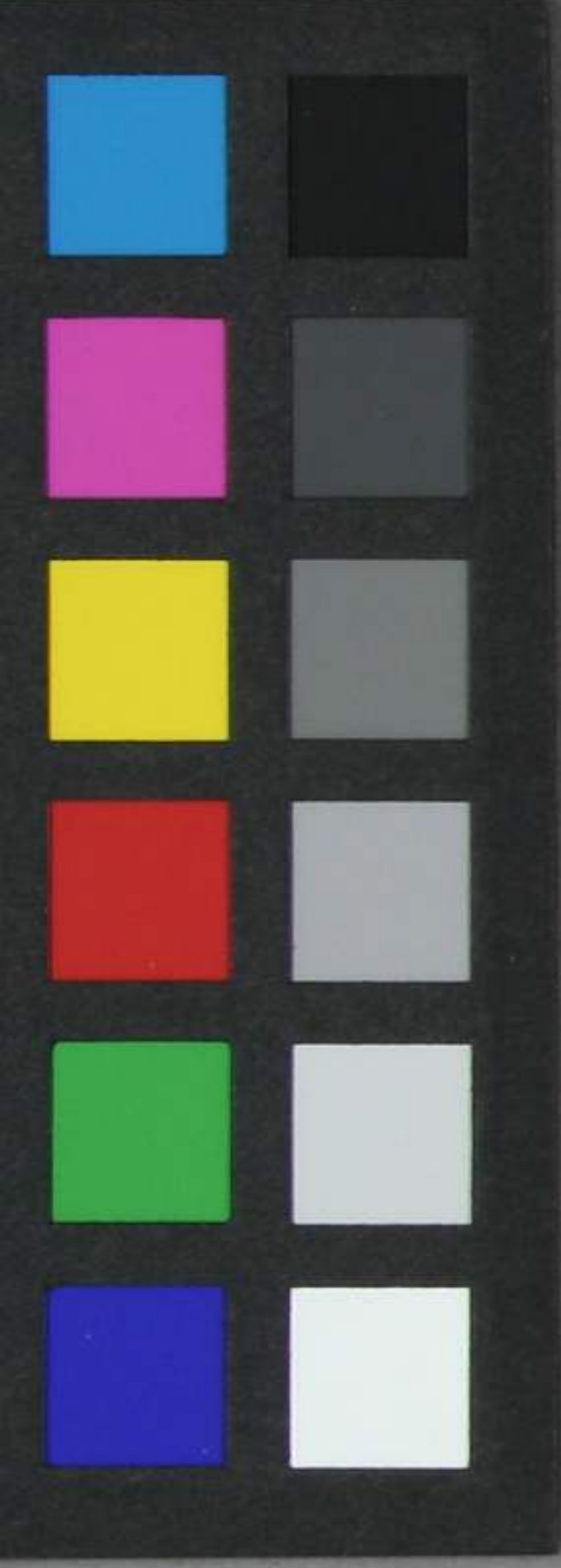
空に眞赤な

白秋民謡

1



A R S







白秋民謡の言葉

蕪の二つ三つと、

鱒のひさつかみと、

たつたそれだけで代へてもらひたいのだ、

わたしのこの民謡と。

そして、歌ってもらひたいのだ。

空江暮秋

東京愁夜曲

北原白秋著

酒、酒、酒、酒、  
還れよ、還れよ、  
戀、青春、

小序

白秋

ii

*Handwritten signature*



白秋民謠

I

目次

空に眞赤な (十八章) ……三

紫まつげ (二十五章) ……二三

空に眞赤な

わかき日のロマンの痛飲歌「空に真赤な」その他、  
その仲間の一人が時をりの哀調。



空に真赤な雲の色、  
玻璃に真赤な酒の色、  
なんでこの身が悲しかる、  
空に真赤な雲の色。



あかい夕日に

あかい夕日ゆふひにつまされて、  
酔ようて珈琲店カフェを出では出でたが、  
どうせわたしはなまけもの  
明日あすの墓場はかばをなんで知しろ。

びいる樽

ころがせころがせびいる樽だる、  
赤あかい夕日ゆふひのなだら坂さか、  
とめてもとまらぬものならば、  
ころがせころがせびいる樽だる。

かるい背廣を

かるい背廣せびらを身みにつけて、  
今宵こよひまたゆく都川みやがは、  
戀こひか、ねたみか、吊橋つりはしの  
瓦斯ガスの薄黄うすぎが氣きにかかる。

金と青との

金きんと青あをとの愁夜曲ソウヤク、  
春はると夏なつとの二聲樂ニセイガク、  
わかい東京とうきやうに江戸えどの唄うた、  
陰影かげと光ひかりのわがこゝろ。

歌うたひ

悲しいけれどもわしや男、  
いやでもお酒をさがしませう、  
赤いセエリイもないならば、  
飲んだふりして就寝みませう。  
みすぎ世すぎの歌うたひ。

薊の花

今日も薊の紫に、  
刺が光れば日は暮れる。  
何時か野に来てただひとり  
泣いた年増がなつかしや。

歌ひ時計

けふもけふとて氣まぐれな、  
晝ひるの日ひなかにわが涙なみだ。  
かけて忘れたそのころに  
銀の時計も目をさます。

朝の水面

朝あさの水面みづうの燠銀いふしぎん  
泣なけばちらちら日が光る。  
わしがこころの燠銀いふしぎん、  
けふもさみしくちらちらと。

青いソフトに

青いソフトにふる雪は  
過ぎしその手か、ささやきか、  
酒か、薄荷か、いつのまに  
消ゆる涙か、なつかしや。

意気なホテルの

意気なホテルの煙突に  
けふも粉雪のちりかかり、  
青い灯が點きや、わがこころ  
何時もちらちら泣きいだす。

薄いなさけに

薄いなさけにひかされて、  
今日もほのかに來は來たが。

思ひきらうか、きるまいか、  
そつと歸るか、何とせう。

いつそあの日のくちづけを、  
後のゆかりに別れよか。

思ひきらうか、たづねよか、  
ええ、なんとせう、しよんがいな。

夜ふる雪

蛇目の傘にふる雪は  
むらさきうすくふりしきる。

空をあふげば松の葉に  
忍びがへしにふりしきる。

酒に酔うたる足もとの

薄い光にふりしきる。

拍子木をうつはね幕の  
河岸の夜ふけにふりしきる。

思ひなしかは知らねども  
何か、未練が、ふりしきる。

蛇目の傘にふる雪は  
紫うすくふりしきる。

花  
火

—

銀と緑の孔雀玉、

パツとしだれてちりかかる。

義理と情の孔雀玉、

涙しとしとちりかかる。

二

夏の夜ごとの遠花火、

紅くとろけてちりかかる。

わかいいこころの孔雀玉、

薄い月夜に消えかかる。



あれは上野か

圓弧燈の紫に  
白い湯氣吐く汽車の音、  
あれは上野か、山下か、  
逢ひに行く夜の身の軽るさ。

忠 彌

雪はちらちらふりしきる。  
城の御濠の深みどり、  
小石投げつけ、千鳥足、  
いまは忠彌が身のみつまり。

帽子ピン

憎い殺すで、なぜ泊めた、  
それは昨夜の帽子ピン、  
とかくお前はつきつめる、  
あれよ、お午の鐘が鳴る。

紫まつげ

都會の片隅に住み、華やぎ、また萎るる、  
あはれなる人びとの歌。

紫まつげ

1

ひたと瞪つた  
圓ら眼ばかり、  
縁のまつげの濃紫。

2

紫まつげと  
圓ら眼の瞳、  
孔雀玉とは誰が云うた。

3

少しうつむきや、  
あの横顔の  
長いまつげの濃むらさき。

26

長いまつげの  
かはいの露よ、  
ほろと落ちそで、  
まだ落ちぬ。

4

27

羽根帽子

オペラのボックスにて

1

おまへ、かはいい

おはねの帽子よ、

うしろ向いたで、なほかはい。

2

おまへ、お連れか、

おとなりさまか、

猶太の鍵鼻、革囊。

3

おまへ、かはいい

紫ほくろ、

つんと横よこ向むかく羽根帽子。

口笛吹き吹き、  
そしらぬふりよ、  
かはい、小憎らし、羽根帽子。

雪は紫

雪は紫、  
宵の雪。  
窓から、チラチラ、遠燈、  
どうで逢はれぬ戀ならば、  
せめて遠目にマンドリン。

雪は紫、  
 圓弧燈、  
 泣いてゐましょか、掛けましょか、  
 どうせ添はれぬ戀ならば、  
 いつそこのまま小夜吹雪。

月は桃色

月は桃色、  
 宵の月、  
 窓に腰かけ、街の月、  
 どうで逢はれぬ戀ならば、  
 せめて爪弾き、マンドリン。

月は桃色、

燈はともる。

ちよいと出ましょか、寄りましょか、

どうでかくせぬ戀ならば、

いつそ珈琲の濃紫。

あれは濠端

あれは濠端、

春の月、

水には、チラチラ、遠燈、

逢ひに出ましょか、止しましょか、

小さい電車も駛ります。



オペラ戻り

1

オペラ戻りの小夜ふけて  
空には二十日の月の暈、  
狐いろした月夜でも  
たまにや萌黄の雨もふれ。

2

夜ふけて歸れば響み屋根、  
空には弓月、狐いろ、  
鍵も合はねば、戸もあかず、  
どうせ、降られた一人もの。

3

椅子は椅子とて壊れ椅子、

卓子は卓子で腰曲り、  
紅いポルドオは瓶ばかり、  
男やもめにや、雲脂ばかり。

4

蠟燭一片、酒は無し、

せめて灯だけでも点けましょか。

「おや、おや、壊れ卓子があります、  
これでもピアノに見立てましょ。」

38

さあさ、シヨパンの愁夜曲、  
青い月夜になります。

5

紫睫毛の目ばたきと、  
紅い唇、

そればかり、  
いえいえ、首すぢ、うしろつき、  
名さへ知らねば、しよんがいな。

39

尺八のながし

どうぞやく、ほうほろり、  
あはれなものでしよ、ほうほろり、  
どうぞやく、ほうほろり、  
右やひだりや、ほうほろり。

バアの主人

七日のお月さまオリーブ色。  
お鳩もほうほう、啼きましよで、  
今夜お光來を願ひましよ、  
先のお貸しもおついでに。

橋の下のお菰

ここは橋の下、お茶の水、  
萌黄のお月さん、雨あがり、  
秋刀魚焼かうか、  
接吻しよか、  
此處はヴェニスか、セエヌ河。

ニヒリスト

ああ、あの金持も殺された、  
ずるぶんお金は溜めてたろ。  
ああ、あの政治家も殺された、  
権力が頼りでやつてたが。

ああ、あの哲學者も心中した、  
戀に命を投げ出した。

ああ、あの夫人も家出した、  
歌もさほどぢや無いんだがな。

ああ、あの連中もビクビクだ、  
名まへばつかり恐れてる。

とにかく、皆さん、仕合せさ、

なにかに頼れりや仕合せさ。

ああ、ああ、わたしはこれきりだ、  
何もかも、もう、おさらばだ。

## 乞食學校

校長は乞食の親分で、お盞ぐるみでゾロリとした風、八字髭、金鎖を帯にまきつけてゐる。座つて拍子木をたたく。

教師は親方の女房、小意氣な姉御風。これも上手に座つて三味線を弾く、美くしいが權のある顔。かういふ小學校は事實本所邊にある。この唄は「茄子かぼ」のやうな節。

46

さあさ、來た來た、ひよつこひよつこ、飛んで來た、  
跛びつこどんのお稽古けいこだ、びつこびつこ曳ひいて來た。  
お囃子はつしに合あはして、お腰こしを一ちよいと振ふつた。

右みぎの肩落かたおつことして、左ひだりをびよつこり振ふつて、  
それこそ可愛か想はいに、片足かたあしひよつこひよつこ。  
うまいぞうまいぞ、その足あしその足あし。

47

さあさ、來た來た、のつそのつそ、匍はつて出でた。  
足蹇あしなへどんのお稽古けいこだ、兩手りやうてで匍はつて出でた。  
お囃子はつしに合あはした、お尻けつであるいた。  
右みぎの足あしを投なげ出だして、左ひだりは折をり曲まげて、  
それこそ、みじめに、泣なく泣なく見み上げて、  
うまいぞうまいぞ、その眼めだその眼めだ。

さあさ、来た来た、こつこつこつ、やつて来た、  
小盲目どんのお稽古だ、眼塞いで出て来た、  
お囃子に合した、お杖で探した。  
時々眼あけて、慌てて塞いで、  
それこそ困つて、途方に暮れましょ。  
うまいぞうまいぞ、その杖その杖。

さあさ、来た来た、ぶるぶる、ふるへた。  
お袋どんのお稽古だ、赤んぼを寝かした。

お囃子に合した、お乳をはだげた、  
赤んぼをあやして、お尻から捻つて、  
それこそ、ひいひと、泣かした泣かした。  
うまいぞうまいぞ、その手だその手だ。

わつしよわつしよで

わつしよわつしよで、

早や夏祭、

伊達の花笠。

馬鹿囃子。

わつしよわつしよで、

神田の祭、  
祭過ぎたら、  
また、瘦せた。



道化もの

ふうらりふうらりと出て来るは  
ルナパークの道化もの、  
服は白茶のだぶだぶと戯け澄ました身のまはり、  
あつち向いちやふうらふら、  
こつち向いちやふうらふら、  
緋房のついた尖がり帽子がしをらしや。

鉛粉眞白けで丸ふたつ  
頬紅さいたるおどけつら、  
圓い眼ばりもくるくると今日も呆けた宙がへり。  
かなしやメエリイゴラウンド、  
さみしや手品の皿まはし、  
春の入日の沈丁花がどこやらに。

ひとが笑へばにやにやと、  
猫のなきまね、烏啼き、  
たまにやべそかき赤い舌、  
嘘か、色眼か、  
涙顔。

鳴いそな鳴いそ春の鳥、  
鳴いそな鳴いそ春の鳥、  
紙の櫻もちらちらとちりかかる。

薄むらさきの圓弧煙、  
瓦斯と雪洞、鶴のはね、  
石油エンヂンことことと水は山から逆おとし、  
臺灣館の支那の兒、  
足の小さな支那の兒、

しよんぼり立つたうしろから馬鹿囃子。  
ぬうらりしやらりと日が暮れて  
またも夜となる、道化もの、  
あかい三角帽をちよいと投げてひよいと受けた  
ら禿頭。  
あつち向いちやくうるくる、  
こつち向いちやくうるくる、  
御愛嬌か、またしてもとんぼがへり。

空に眞赤な

定價參拾錢

有 所 權 版

刷印日二十月十年一十正大  
行發日五十月十年一十正大

秋 白 原 北 者 作 著

者表代スルア社會資合  
雄 鐵 原 北 者 行 發  
號五地新町張尾座銀區橋京市京東

郎 五 井 國 者 刷 印

七ノ三町區寄銀元區橋京市京東

子 金 本 製

發 行 所  
東京市京橋區  
銀座尾張町  
會合資  
ア  
ル  
ス  
電話銀座二一九三番  
振替東京二四八八番

トツレフンパ秋白

第一輯	第二輯	第三輯	第四輯	第五輯	第六輯
月光微韻	落葉松	初冬の星	動き來るもの	薄陽の旅	雀の頭巾
短唱	短章	短章	詩集	民謡體章	小唄

北原白秋氏著及裝

定價各册  
送料各册  
貳參拾錢

白秋民謠

第一輯	第二輯	第三輯	第四輯	第五輯	第六輯
空に眞赤な	さすらひの唄	朝草刈り	月のパヤ	椰子の日永	岬の夕焼

定價各册參拾錢  
送料各册貳錢

白 秋 童 謠

- |     |    |    |   |        |        |        |        |
|-----|----|----|---|--------|--------|--------|--------|
| 第一輯 | 螢  | こ  | 苺 | 小杉未醒氏畫 |        |        |        |
| 第二輯 | 夢  | の  | 小 | 函      | 前川千帆氏畫 |        |        |
| 第三輯 | こん | こん | 小 | 山      | 小杉未醒氏畫 |        |        |
| 第四輯 | お  | 祭  | の | こ      | ろ      | 木村莊八氏畫 |        |
| 第五輯 | お  | 月  | 夜 | の      | う      | た      | 森田恒友氏畫 |
| 第六輯 | ね  | ん  | ね | の      | お      | 鳩      | 木村莊八氏畫 |

北原白秋氏著

菊 版 定價各册參拾五錢  
二度刷美本 送料各册二錢

繪 入 童 謠 集

北原白秋氏著

こんぼの眼玉

定價壹圓九拾錢  
送料拾七錢

子供が手を叩き足を跳らして喜び歌ふ唄はこれです。殊に本書の  
誇すべきは童謠一篇ごとに燦然たる原色及び色刷の挿畫を一葉  
づゝ附せることであります。

森田恒友氏裝 初山滋氏畫

清水良雄氏畫 矢部季氏畫

北原白秋氏著

初山滋氏裝及畫、

矢部季氏挿畫

兎の電報

定價壹圓九拾錢  
送料拾七錢

本書はこんぼの眼玉の姉妹篇にして、白秋氏の童謠三十篇に二畫伯  
の力作になる華麗なる挿畫三十六葉を原色及び色刷として各篇ご  
とに收め興趣真に無量

英國童話 まざあ・ぐうす

北原白秋氏譯

口畫原色版六葉凸版拾數葉

まざあ、ぐうすは英米の子供達に昔から愛されてゐる世界的の童話集でございます。この童話の中にはお月様を飛び越ゑる牡牛のダンスや「パンとお煎餅」さうなるロンドンのお寺の鐘や拇指よりも小さな豆つぶの旦那様やさうした、それは不思議で美しくておかしくて馬鹿々々しくて、面白くて、笑ひたくばては歌ひたくなる童話ばかりを白秋氏が實に輕妙な日本の民話調に譯されたものであります。

四六版色刷極美本

定價 貳圓八拾錢  
書留 送料拾七錢